



標記のゆゑ

二

^ 13
3095
3



門 へ 13  
3095  
巻 3

ゆい巻の二  
曲亭馬琴つくり

昭和九年七月二三日

ゆい巻の二

曲亭馬琴つくり

斟藩子  
標記

横死

横死  
横死  
横死

伏見

山城国紀伊郡  
あり古ふ

伏見の寓居

栗門佐二郎の又の佐大夫が横死とあらむとけ井と杖掖と只顧小路  
いとし。播磨路と過る津田と終る。伏見の御をくむれ路の上より  
ひひもろけと昔丹波あり。又佐大夫が庇と稟しり。楚平とりやの夫婦  
久しからふゆるふあひふりしと互ふこいのうふとま。恙あきと終ひゆりふ  
楚平の佐二郎が女とけひと。旅もろ形容の何とやん怪しきとらつもの  
故と向ふ佐二郎のこがうんとぶくおごうと。け井とも名對面をささく  
ゆへま方もろまじと洛の諸國の人の集會とらあまら世とら。便もあらん  
とくおごるといひ楚平少く。そのまらまを憐れ。縦治小判りやま

ゆい巻の二

前編





さか  
りお  
あし  
何  
楚  
夫  
あ  
法  
若  
う  
る  
る

あ  
り  
お  
の  
り  
お  
の  
り  
お  
の

あ  
り  
お  
の  
り  
お  
の  
り  
お  
の



さ  
か  
り  
お  
あ  
し  
何  
楚  
夫  
あ  
法  
若  
う  
る  
る

あ  
り  
お  
の  
り  
お  
の  
り  
お  
の

あ  
り  
お  
の  
り  
お  
の  
り  
お  
の



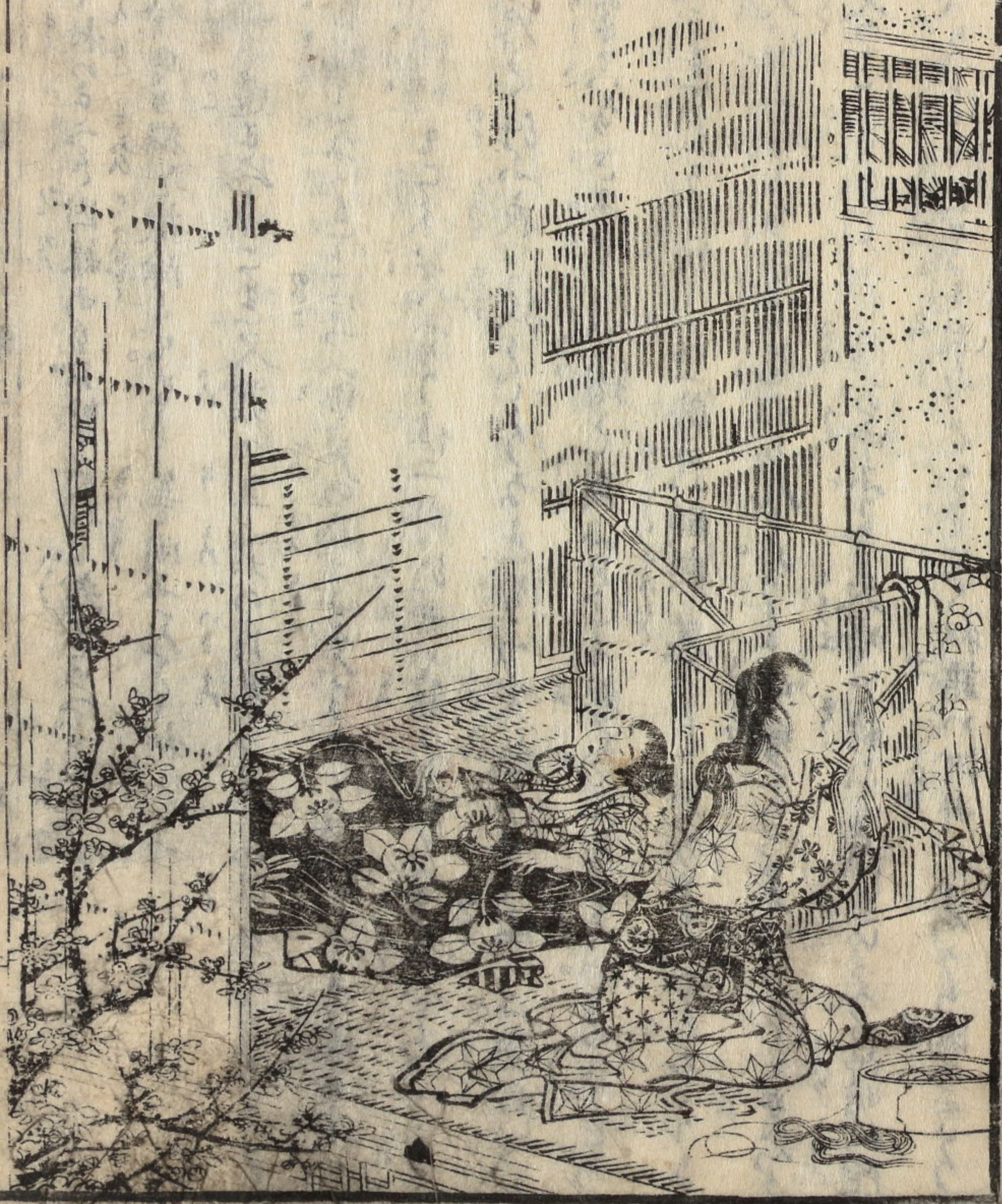
聖  
和俗僧と  
捨れし聖  
りし聖の神明  
不測の号  
一室  
僧家の三  
ハ法持僧  
遺るの聖  
ふゆらじ  
書の大甲  
天の御  
尊の御  
自ら御  
尊の御

まふこそとらふ佐二郎さねて。維新の事ありて吾侪と六年らふ  
 ともらふ。思ひまらう恩之且今宵聖と宿くも二室とさるの一端  
 ありらふ。まふしつ命とらふと救せしむるも。さるもと贖ふ善根の  
 ありあふ。さるも果の不法師眼と贖く。走奴のつらひ道とさ  
 ら尊ふありと道とさる。と自業自得はく。誰か公誣す  
 贖ん汝も又犯せる罪あり。今ふらひあらとせといさす。かち釘抜  
 ずのりのとりと。さる楚平が古と抜く。長やふ引中。件のナとさ  
 ら。さる忽地獄と縮とら。又さる妻とらひのさる。ふ二人の肢體や  
 かく黒くまらうと死ふ。さる佐二郎汀井のつらひ。活る心さる。今ふと  
 脱走らんとも。さる一身麻痺と。走らんとも。さる走らひ。さるの時法師  
 もとさる。さる招く。さる頭陀袋のつらひ。さるさる。さる一團の猛大りえ。出く

佐二郎が裳汀井が帯ふ。死らむ。何と叫ぶ。諸共小將輜婦の夫と救んと  
 夫の婦と助んと。さる。佐二郎が左の脚脱ふ。爛と吐。嗟諸共  
 焼も死とさる。さる。忽地東方さる。光明赫奕とさる。一室は  
 照らさる。彼法師とさる。怖とさる。消とさる。逃亡とさる。怪とさる。火もさる  
 湯。佐二郎汀井が苦痛。頭と去。さる。夫婦の屠処の羊の絆と。放  
 さる。さる。さる。起らる。えさる。怪とさる。髪とさる。結  
 一人の童子。端然とさる。後方とさる。さる。壺と水と。湛柳の篠  
 さる。浸とさる。さる。さる。さる。神とさる。仏とさる。さる。楚と  
 さる。さる。さる。回数とさる。さる。童子告とさる。善哉とさる。今  
 夫婦と救らる。原との功德ありと。善報とさる。さる。年とさる。と  
 信とさる。某の年某の月某の日ふ。さる。厄難あり。さる。さる。

徳川の系  
徳川の系  
徳川の系  
徳川の系  
徳川の系

佐二郎  
夫婦  
奇童の  
救ひを  
急難  
を脱す



巻二

前





美の加美成  
に於て美成  
各夜也美  
又度成乃介

この世の世々

七

前

ろども息のうらみん従ひいふはしそ救つらとく。楚平が家賊調度いふらと。  
 佐二郎の井ももろとら落し衣服と脱く薬の代とて醫師のつとまをあて  
 價貴と薬品とも厭つて用とともつめ賤う。病とせ日あやうみへと  
 楚平もその妻も一日のうらふ身あやうの佐二郎夫婦はこの時まぐもも  
 位あみぬらと後ひきつるものとて町守あやうひひつるものうらとこの  
 夫婦も又あはれは夜疾ふうとて。苦難ひつるもあらねどこのうらと  
 疲ふ係もとてうらゆしうらざるものもあはれは隣まの人もことと勤ふ  
 及らど只今茲六支あやうらるる女児家鶏が大人あやう小枕ふを居る。  
 潜忍しうらほる。こととてえん病外せ。又母のちの中いふ苦。かうらん  
 こととてとけ井ゆし熱氣もあやうらるる事。病を推し合ふるもど  
 こととてとまる小忽地眼眩と磯と例とて扶起さんとき。驚るり

後鳥羽院の  
 小殿荒平大  
 十郎といは賊  
 あり夜と太師  
 赤んその縛り  
 を脱りあは

及びじてうらそも轉帳といふせんくと注すふと佐二郎の頭と握りえ  
 中くととて寝うつらも自在ららとどかじしく十日あやうや月の半  
 ころ。熱ももろとらも清くあきえ。夫婦らるるあやうらと命令を  
 拾つとも佐二郎はうら腰えととも今人物を售盡しとて此の貯る  
 小荒年あつたて。盜賊起つ不起。美女賤宝と奪ひとて世の  
 中いと息削しとてあはれとて六波羅の賊徒を探索とて夥禁獄  
 せり世にどこの賊主とて。榎島夜又太郎。小殿荒平太らんとゆえら  
 ののうらんとて逃亡とて往方まもこととらるるぬらとて佐二郎は  
 こととて使うとてとて。この伏えあはれとて親子三人を彼首と呻吟  
 しこの後のうらあはれとてえん人もあはれとらるるぬらとて佐二郎は  
 故郷の領主秋光朝臣の遺世ありとて永三年の春ふとあはれとて

この世の世々

七

前



大坂の町

前



佐二師  
大坂の町  
麻人  
竹井家  
杖橋  
申吟出  
監録  
紋  
とろ  
り

夫木  
伏見  
川  
和木  
美咲  
波  
恒振の  
相と  
ろれ

七の川

前

清水の花篋

長門の初志  
 不入之...  
 松主実推...  
 秋光の...  
 とあらん...  
 族...  
 文永五年...  
 春清水...  
 備居の...  
 西州...  
 夫人...  
 娘...  
 晋...  
 出居...  
 其趣...  
 く...  
 大...

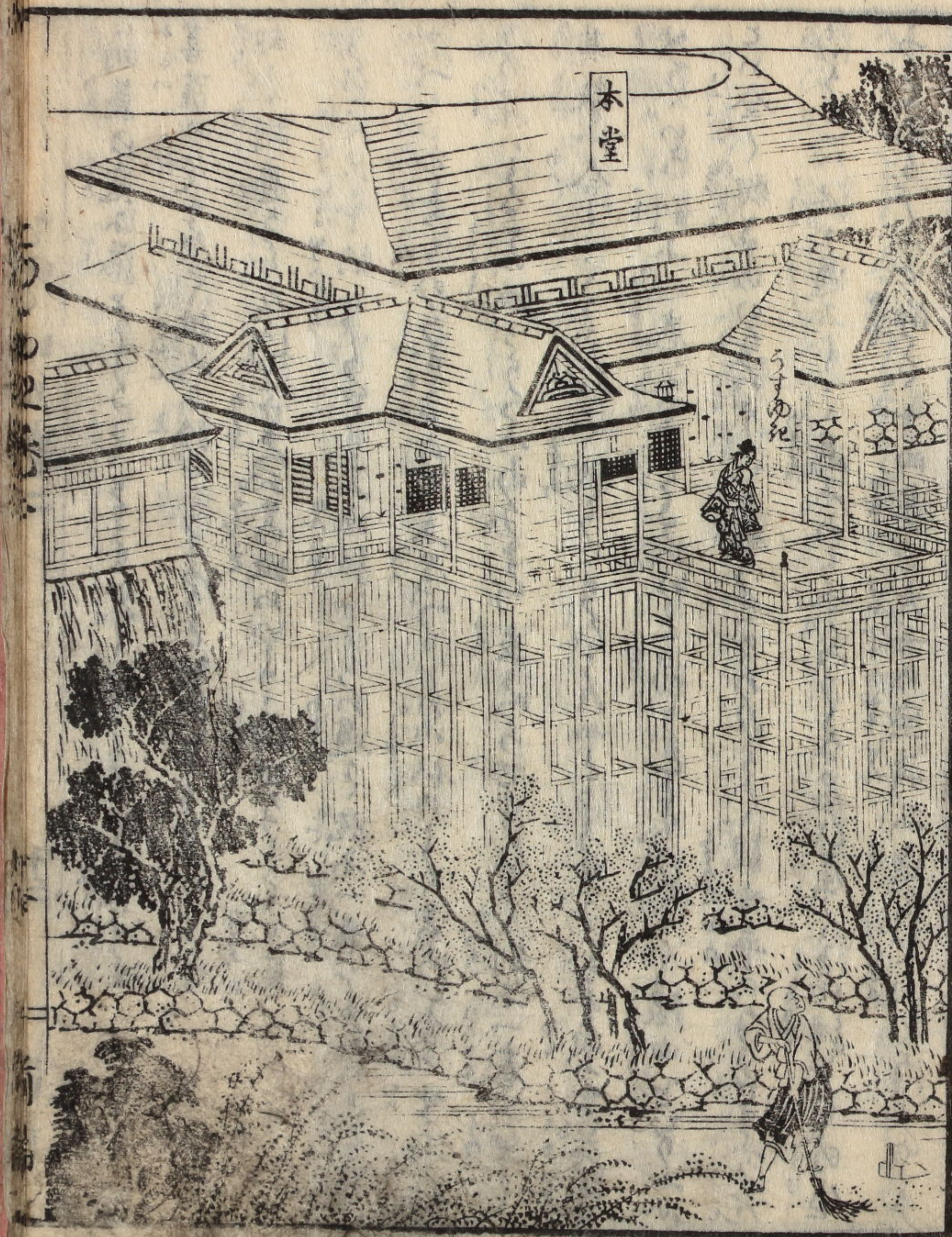
玉の方の薄雪姫...  
 清水寺の境内...  
 移り...  
 や...  
 遠く旅...  
 世...  
 其方...  
 孫十郎...  
 遺...  
 いと...  
 春...  
 日...  
 憂...  
 慰...  
 母...  
 矢...  
 左衛門...  
 尉...  
 寛...  
 柱...  
 命...  
 墮...  
 佛...  
 道...  
 年...  
 清水寺...  
 觀...  
 世...  
 音...  
 且...  
 今...  
 秋...  
 朝...  
 臣...  
 別...  
 洛...  
 今...  
 又...  
 佛...  
 境...  
 内...  
 不...  
 住...  
 家...  
 境...  
 内...  
 不...  
 信...  
 心...  
 讀...  
 經...  
 今...  
 夫...  
 母...

薄雪姫...  
 觀世音...  
 五百...  
 私...  
 七...  
 題...

薄雪姫も亦觀世音と信...  
 親子の薄命...  
 父の前妻...  
 物...  
 彼...  
 後...  
 兄...  
 實...  
 後世...  
 痛...  
 普...  
 書...  
 亡...  
 觀...  
 世...  
 音...  
 救...  
 冥...  
 土...  
 苦...  
 難...  
 昔...  
 被...  
 經...  
 文...  
 書...  
 一...  
 日...  
 懈...  
 餘...  
 生...  
 念...  
 願...  
 成...  
 就...  
 如...

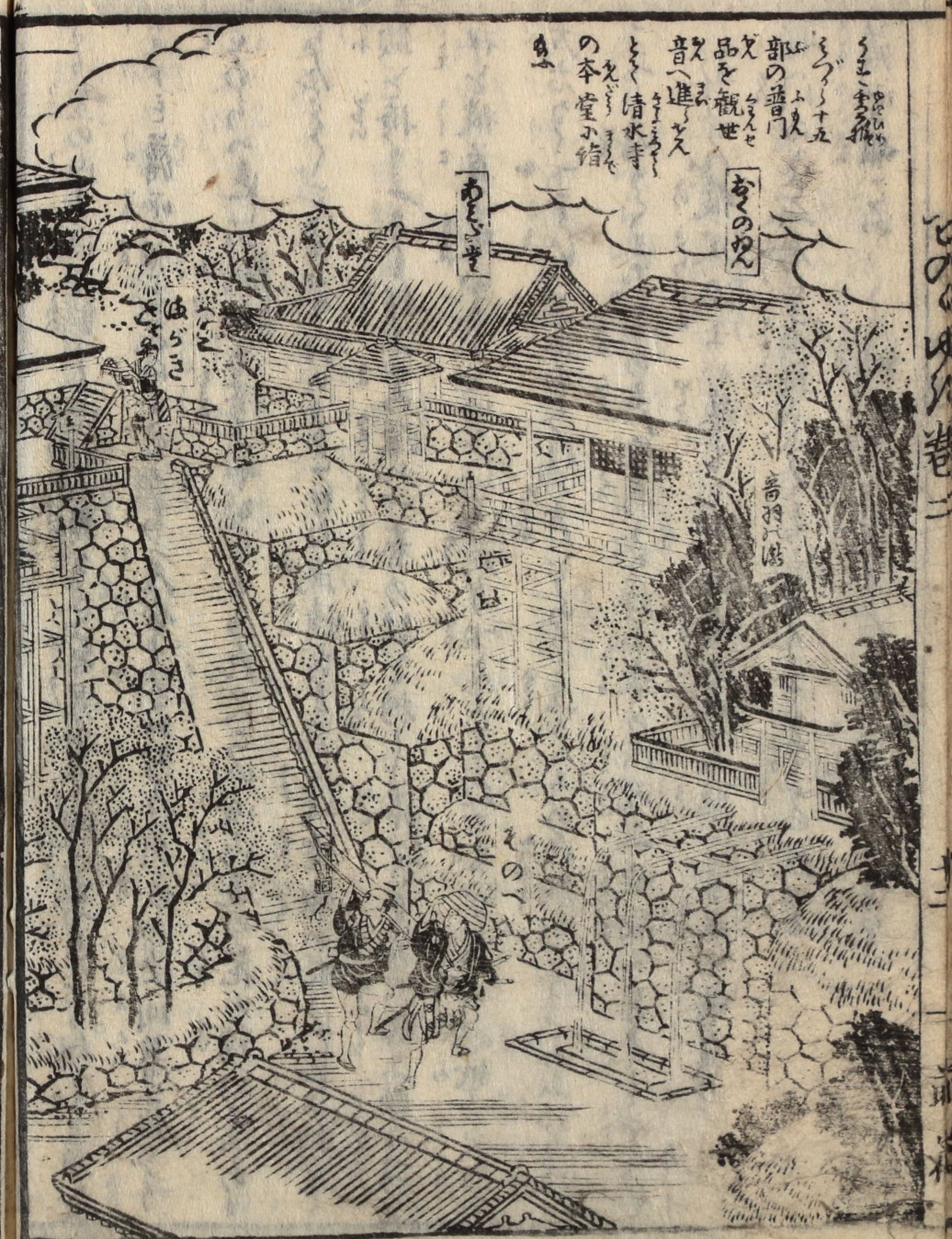






本堂

うすゆり



あじき

おのね

くまのまはら  
まづら十五  
部の普門  
品を觀せ  
音へ進へえ  
とく清水寺  
の本堂の指

音羽の湯

この山は  
音羽の湯



薄雪姫の墓  
薄雪前集公  
を葬りしに  
あそび

こころ持例うらむ食ふ人ともうねむ玉の方うらむあひし。こころよ  
 勤うらむがま垣のねらうらむかろうともまらぐ。昼夜看病し孫十郎も  
 信中小葉ゆるもあし本走もかくく卯月の端ふ及びく。薄雪姫の  
 病若やめらう。髪もどろろあげさしむむの方いさうさ垣もさく  
 飲ぶく。こころうらむく夜と安らうふ睡もくとぬらう。さうく西三日とゆる  
 玉の方。薄雪姫小室ひらひらもさしひきふ難錯しうらぐ。うら  
 人の年も引籠くゆせむこと。あつらうら氣も鬱もく病もさる路中  
 晴はほくく人目ひびくもあらん。小野の遠祖の墓もあしと且く  
 ゆるり里うらむ彼野うらむ出くたむまへ。させる集あらむとも氣風  
 養うふらん孫十郎と従へりあらんともあつとも彼が活業ふ  
 眠るるとこのぶらうらむ使ひくるふ又供也もいひじも垣の

薄修寺  
池の名蓋この  
薄修寺

むむと丈夫もあつらうらむの彼と持くゆさうらむ路の妨もあつらうらむ  
 うらむひらうらむと毎日ふらひ出うらむさうらむ薄雪の母の  
 仰ふ悼むとわがせむ推辞もあつらうらむ日天く晴る朝うらむ小野の  
 墓小葉ゆるもあし母上もあつらうらむも踏まはしとゆらむあつらうらむ  
 水がらうらむかうらむとじうらむ。観世音小祈請もあつらうらむ百日回小百遍  
 の普門品と讀もあつらうらむ。因て一日も外へ出らうらむと孫十郎も彼処ふ  
 り。あつらうらむとせむとせむとゆらむとせむとせむと促しうらむと  
 薄雪も今に巳ととゆらむとせむとせむと俱し。母小辞しとせむとせむと  
 衣服とつらうらむ小野とせむとせむとせむとせむと夏方向く若葉がらむ社鶏の  
 ちうらむ鳴もあつらうらむ風景りへうらむもあつらうらむ路まがらうらむ飽ぬるがらむあつらうらむ  
 勸修寺もあつらうらむ。深草の將の通路とらうらむあつらうらむとせむとせむと

薄修寺









薄雲を霞  
墨海の雲  
まどひ来と  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた

この  
巻二

十七

新  
谷  
所





一卷とすしるひぬらつら願ふの成就せざる祥とあらばはしり  
 命のうらふ父不ありやうあらぶもさうす彼に経と。それ不返さるる  
 更不祈念しははふらふもさうの処あくるの経とさるるを弘誓  
 圓通大井の示現とぞおがゆる。わく明白不告やわらまると憐れも少  
 まり。そく返しははせまるとさるる審不語まは彼人少くきと下と鳴りし  
 奇なるか奇なるもさるる。これいれ身が父秋光朝臣と未地への封疆とま  
 丹波國氷上の領主園部長海尉が一子不右衛門仇頼胤とりのり  
 秋光洛不在世し時い。ま父と交疎くらさし不鎌倉へ向のら一封の  
 尺牘不安否と向ひ向すのさるるあうふ文永三年の春父長海尉  
 公不因と鎌倉不赴と秋光朝臣もえは。二人の子さるるを公のし  
 の時い月いる月十三四丈とく。沈魚落雁雁の容止るのさるるをさるる

尺牘  
 書翰の一種  
 まり

沈魚落雁  
 宋之問の沈  
 妙篇を讀む  
 入松澤の魚  
 沈荷花作  
 一のう後世  
 女子の佳称  
 とせう又莊  
 子も毛嬙西  
 施父の美と  
 まるところ  
 人魚いざと  
 入る鳥を  
 これいざと  
 まるくは  
 五三の鳥  
 美人入ふ  
 一のう後世  
 沈魚落雁

怜利しけるもさるる父竊ふ愛く。誓縁の工とも語らひ嫁ともさるるや  
 らつとりのさるる媒とびさるる不黙止し。むはくは洛ふ及び  
 けさるる年の秋のさるる秋光道世ありと。妻子の洛へ上りぬとい  
 少えくその後定うらさるる又父長海尉この二年以て持病の  
 積聚さるる。糸地氷上ふ引籠まるとさるる舊交ありとつと  
 彼人の妻子と索ふ及りむ。その春父の病も少くもさるる  
 又ゆらふある日頼胤おりのさるる。さるる月かく老るるのさるる  
 後のともいと易し。汝も既み廿三歳さるるの婚縁ともさるる  
 後嗣ともさるる時さるる。いざとさるる及びさるる。これ往年鎌倉ふ  
 りりしとさるる小野秋光の女児とさるる。嫁ともさるるさるる  
 少えくさるる同ふ秋光朝臣道世。今又その妻子の所在はさるる

あつことも一旦さうふ賤しつらつらふふの人の零落まゝとてさうぢふ  
 止へさふわらふ。まゝのまゝらむど秋光朝臣と六年春の交うけりももく  
 彼人くふ環會が誠心ともまらせは汝がふふ婚姻の事と相語りやとむり  
 のまゝ病軀年と起り給事ふ等周るまふ今ふ志と後にはは密に  
 洛へようくらの所在と探りさしはとく叮嚀不教諭さしと仕さる  
 身のさう易さの僅西三人の徒者とせり。まのびやうふ洛不赴と立條さる  
 不旅宿と見て毎日洛中洛外と漫り。りつらら母母子の所在は  
 探りまらんとせしふりひらや。一卷の経小仏の導とけり。舞くさふわらん  
 といふふ普門品も。若有女人説欲求男。礼持供養親世音  
 菩薩。便生福德。知恵之男説欲求女。便生端正有相之  
 女宿植徳本。衆人愛敬。と説する不達りともは因の縁あり然ら

源書集要  
 親と定り  
 源書集要  
 親と定り  
 源書集要  
 親と定り

内男いふ妻あり内男が又いふが又ふははは能く不肖なうとてども  
 義小仗の胃の往方と索再會とさうく。小野と園部とさうく  
 潘揚の好と締へ。内男がさうかやと向さる薄雪那。にじりらと  
 人の良悪ふもさうりり。わらわら顔うち背つて稿ふえさる  
 洛も又締らるる。又男いふさうふさうあつこも。頼朝も應どさし  
 ちりく。さう小兄あまも志入ふ似て只一人の家談い。實推と  
 ろり小又の往方と索ん。遠く旅がら。寔ふさうさうさうさう  
 こと又と又とのさうとさうさうさう。かく懇切にさうさう  
 さうさうさうさう。詩も柯と伐と如何弁ふあつた。克  
 事と娶と如何。媒あつた。得さうさうさう。知と又の物語ふ  
 さぬ。和奇さうさう。

源書集要  
 親と定り  
 源書集要  
 親と定り  
 源書集要  
 親と定り

葉の山見も入らん... 夫婦の縁は... 母もせまらん... 再ひめとて... 定めは... されも又又... 人の志も... 既小の... 出入る... 推辞... 概と驚...

葉の山見も入らん... 夫婦の縁は... 母もせまらん... 再ひめとて... 定めは... されも又又... 人の志も... 既小の... 出入る... 推辞... 概と驚...

香の宮... 二町... 右近... 神社...

の歎苦と... 一口飲く... やぐく飲乾く... ね。ねく... いらふ... くら。その馬... 彼と待... 足らう血... かつの命...





園部右衛門佐頼胤  
 深草の里墨跡の辺  
 少く薄雲雉の危殆  
 とまじく経とくしあ  
 志と告ぐと違ふ  
 いもあつとひと  
 ほりよ

2のゆい巻二

廿三

三時

薄雪も垣が死なず不安堵く。身も一たび死にぬふらの君の  
 か抱とゆく蘇りぬ又失ひつらぬ経と拾ひまづもこの君あり。とあらまも  
 けをさしと告ぐふよ垣のやとく驚嘆しく。厚く園部もさしひゆゆ  
 向ふ頼胤の従者も馬の背とさく。伏すのさうりありし程ふ頼胤の薄雪  
 後小対く。それもさうりのあうたびく。さうればひひふあうらう。く  
 送りあうまじ。淡くく前ふさす。垣もさうり御導ひさうさうさう。さ  
 赤つれまうゆとさうり。十歩ふ及ぶも忽ち後方う。走卒とさうさう二人の  
 旅客長と西口と一振の宿ふ被げく。瑞と梅りおらうら。夜がさうさう走りあう  
 園部とさうさう。西人めらうさう小境さう。殿某等氷上さう。大急の使と  
 兼さう。益夜路とさうさう。只今旅宿さう。まうさうさうさうさうさう。さ  
 汗と押拭。頼胤少く。大急の使とさうさう。さうさう。故と向さう。さう。の

画入巻く大殿の病さう。二三日以来俄頃不重さうさう。既小危くさうさう。さ  
 ありさうさうさうさう。さうさう。項不掛く書笈の裡さう。左臣が書。口とさうさう。さ  
 進らされ頼胤く。驚とさうさう。お夜と讀さうさう。かさうさうさう。さうさう。さ  
 さい直ふ丹波小馳く。さうさう。さうさう。又我小初くさうさう。仰く。又馬と率せ  
 づの従者とさうさう。汝いらの女子主従と清水寺の門前さうさう。送て其処  
 さう五條の旅宿あり。彼知ふ留さう。二人の家縁もさうさう。相語ひ物さう  
 さうさう。氷上小初さう。さうさう。さうさう。さうさう。又薄雪小対  
 くとさうさう。父の病危さう。告めさうさう。小袂とさうさう。さうさう。さうさう。さ  
 さうさう。父の所し。さうさう。さうさう。音耗進さう。さうさう。果も馬  
 閃りと歩騎と鞭と鳴らし足撥とさうさう。さうさう。馳去さう。二人の  
 さうさう。主小後さう。さう。舊の路。走さう。さう。薄雪。娘さう。さう。さう。さう。さ



